（「日本雑草学会の東北支部の機関紙「東北の雑草　2：6－13（2002）」の掲載原稿の河川敷の雑草に関する部分です。」）

除草剤の創製研究からみた雑草学と雑草管理＊

萩本宏**

要約　雑草学と除草剤の創製研究、特に生物学的研究との関わりおよび雑草管理と除草剤の関わりについて考察した。また、わが国の除草剤の創製研究がおかれている困難な現状を企業経営の視点から考察し、雑草管理と除草剤の関係の相克から協調への転換、今後の雑草学の新しい分野としての景観や環境問題への取り組み、学会支部会への期待も併せて論じた。

河川に関係する記載部分

著者は、雑草学の取り組むべき重要な分野として、景観や環境の問題があると考える。農村地域は、擬似自然が豊富なために景観に対する配慮を欠きかねない。他方、市街地の景観の劣悪さは、先進国を一度でも訪ねれば容易に認識できることである。著者の住む京都市は、わが国の代表的な文化観光都市かつ伝統産業由来のハイテク産業都市であるが、町並みや街路は特定の地域を除いて、古典的でもなければ近代的でもなく、美しいとは言えない。京都は、千年の王城の地という威光を背に、自然景観に恵まれている（いた？）うえに、古い建築物と庭園が点在し、芸術品や伝統行事、古典文学など先人の遺産が多いから美しいと錯覚しているが、実体は自然と遺産を食いつぶしているだけである。調和を欠いた建物と無粋な電柱電線が醜さの根源であるが、道路、空き地、堤防などの雑草の問題も無視できない。最近、著者が京都の景観で注目しているものに河川がある。街の中心を流れる鴨川（賀茂川）の景色は、最近、川らしくなり、水遊びする子供や釣り人、愛鳥家が増えた。これは、流れを自然にまかせて、中州や岸辺の土砂の堆積を残し、雑草もそのままにしたので、水流に湾曲、緩急、深浅、陰影ができて、水辺移行帯的な状況が出現し、魚や鳥が棲みよい環境になったからであると推察する。しかし、堆積した土砂には木本性植物が生え始めており、水害防止に責任をもつ行政、雑草を嫌う住民、雑草の刈り取りに反対する愛鳥家、鳥害を恐れる魚協の相互の利害対立が始まっており、雑草管理技術の確立が急がれる。また、京都は、三方を山に囲まれており、かつて赤松の多い里山で、特上の松茸を産出したが、放置されて照葉樹林に遷移するか乱開発の波にさらされている。全国で里山の再生がいわれているが、里山問題は、雑草・雑木管理を抜きにしては解決しない。京都を例に挙げたが、これらの問題は全国共通である。農村地域の景観も、給油所、パチンコ店、スパー、物流倉庫などが乱雑に建てられ、決して美しいとはいえない。良い景観をつくることは、人々に安らぎを与えるとともに、草むらへの空き缶のポイ捨てや不法投棄にみられるような不道徳をなくすことから気候の緩和、大気・水質浄化、土壌保全、野生生物保護など良好な環境をつくることに通ずる。市街地環境の雑草問題は、既に、2000

年の第 16 回シンポジウム（京都）で取り上げられているが、農村地帯も含めて雑草学の領域を農業から景観と環境に、農学分野から工学分野に拡大することも検討する時期にあると考える。

以上